

# 子どもの遊び場における母親同士の「公園づきあい」

—公園におけるコミュニケーションの実態および子どもの遊びへの影響からの検討—

田爪 宏二・大石 美佳・川口 和英  
小泉 裕子・長谷川 岳男・柴村 抄織

## The ways of communication of the mothers who watch their own children playing in the park

Research on the ways of communication of the parents watching their children in the park and its influence on the play of the children.

TAZUME Hirotsugu・OISHI Mika・KAWAGUCHI Kazuhide  
KOIZUMI Yuko・HASEGAWA Takeo・SHIBAMURA Saori.

This research aims at the analysis of communication of mothers observed in a playground of the park. Using questionnaires, we asked the parents of kindergartens and lower grades of elementary schools concerning the aims, the contents and the reasons of their conversational communication in the park. We made further research on the influence of the involvement in communication of the mothers on the play of children.

The results of the research indicate that the parents who engaged eagerly in the communication between them in the park do so not only for their children but also for themselves. And the parents whose children play in their daily life with their friends also engage positively in the communication in the park. These results have been discussed in the paper under the viewpoint of child care and the role of the mothers in the playground of children.

**Keywords:** communication of mothers at the park, eagerness of communication, children's playground

キーワード：公園づきあい，つきあいの積極性，子どもの遊び場

本研究では，公園に代表される戸外の子どもの遊び場における，子どもと同伴している母親同士のコミュニケーション（以下，「公園づきあい」とする）の様相について検討する。

幼年期の子どもたちにとって遊びは生活の中心をなすものであり，遊びを通して様々な事柄を学習し心身の諸側面の発達が促される。また，幼児期において遊ぶ力（遊び能力）が充分獲得されていない子どもは，遊びが生活の中心でなくなる児童期後期において集団の中で低い地位におかれたり，いじめの対象になりやすいという報告もあり

（森，1992），遊びは幼児期に限らず，その後の子どもの健全育成という点からも非常に重要な意味を持つと考えられる。このような子どもの遊びについて，充実した遊びが展開する環境としての遊び場のもつ意味は非常に重要である。その中でも，公園をはじめとする戸外の子どもの遊び場は，戸外での身体を使った直接的体験が不足しがちな現代の子どもたちに対して遊び体験を提供する有効な場であると考えられる。また，公園は本来異年齢児同士の自然発生的遊び集団が形成される場所であり，その意味では幼稚園や保育所，学校とは

異なった遊びや人間関係を経験できる場でもある。特に幼児期は遊びを通して様々な人間関係を経験することで社会性の基礎をはぐくむ時期であることを考えると、幼稚園や保育所、学校といった固定された集団以外とも関わる経験は重要である。このような子どもの遊び場をめぐる様々な問題を踏まえ、本稿の筆者らは、子どもの遊び場の実態と、そこで展開される子育てコミュニケーションに関する調査研究を実施した(川口・小泉・長谷川・柴村・大石・田爪・高城, 2002)。この中では、子どもの戸外の遊び場として公園をとりあげ、国内、海外の公園の現地調査や、遊具建設および子育て支援、育児サークルの専門家を交えた討論会活動などをおこなう一方、実際の利用者である幼稚園児や小学校低学年児をもつ保護者を対象に、質問紙調査をおこなっている。

一方、公園は単に子どもの遊ぶ場所であるというだけではなく、子どもと母親を中心とした保護者とのふれあいの場でもあり、また母親同士のつきあいの場、さらには地域の人々のコミュニケーション・スペースとして、さまざまな役割が期待されている。母親同士のつきあいの場という点に注目すると、公園をはじめとする子どもの遊び場では、母親同士の世代が比較的近く、子どもの年齢も近いといった、同質の母親が集まる場所であることが予想される。このような理由から、子どもの遊び場である公園は、母親同士のコミュニケーションの場としての機能、すなわち子育てをはじめとする共通な話題をもつ母親同士による子育てに関する情報交換、悩みの相談、子どもや母親自身の友人作りの場でもあったと考えられる。大都市子育て環境研究会(2003)の調査によれば、子育てにおけるサポート対象として、母親が期待するもののうち、「近所の、近い年齢の子どもを育てている母親」については、大都市部では地方都市部よりも多く期待する傾向にあり、この結果からも、特に大都市部では、子育てにおける母親同士のつきあいの重要性について伺うことができる。

ところで、上に述べたような公園づきあいの肯定的な側面の一方で、公園づきあいにおける人間関係には難しさがあるともいわれる。公園づきあ

いにおける人間関係の難しさを象徴するものとして、いわゆる「公園デビュー」という言葉がある(例えば、本山, 1995など)。この言葉は、1980年代中ごろから流行したもので、主に就園前の3歳未満の子どもを中心に、子どもが新しい遊び環境や仲間の中に入っていけるのか、という問題を示す言葉である。この背景には、地域社会におけるネットワークの衰退により、母親は子どもが公園という新しい社会に参加し、遊んだり他児と関わったりする姿にこと細かく関わらなければならなくなったという問題があり(汐見, 1996)、母親によってはかなりの心的負担が予想される。この問題について、1歳児をもつ母親を対象に調査をおこなった宮坂(2000)によれば、育児不安の高い群は低い群よりも「公園デビューが不安」と回答しており、母親の育児ネットワークが公園づきあいにのみ限定されている場合は、育児不安の増大をもたらすことが指摘されている。また、子育てに関する知識伝達における家庭、地域社会の機能が衰退する中、公園という場が新たな子育ての情報交換の場となっている(松岡, 1996)。こうした事情から、近年では子どもだけではなく(ともすれば、子ども以上に)母親が公園でのつきあいに参加する場面が増えており、その結果子どもが「公園デビュー」の時期を過ぎた後も、母親同士の「公園づきあい」という形のコミュニケーションは継続されていることが予想される。

本研究では、母親の公園づきあいの様相を明らかにするため、川口ら(2002)において実施された質問紙調査から、公園づきあいに関する質問項目をとりあげ、それらの項目間の関連について新たな視点から再分析をおこなう。具体的には、母親同士の公園づきあいの積極性という点に着目し、これが他の項目とどのように関連するのか、また、その傾向は子どもの学年によって異なるのか、という点を中心に検討する。

さらに、本研究のもう一つの視点として、母親同士の公園づきあいと公園における子どもの遊びとの関連について検討する。本来母親が公園に行くのは、子どもの遊びに同伴し、子どもの保護や遊び相手をすることが主な目的であるから、公園

づきあい自体は、子どもに同伴している母親によっておこなわれる、いわば子どもの遊び場における副次的なものであると考えられる。ここでは、母親同士の公園づきあいが、本来の公園利用の目的である子どもの遊びにどのように影響しているかという点について検討する。具体的には、母親同士の公園づきあいの積極性と子どもの公園における主な遊び相手との関連性について分析をおこなう。

## 方 法

### 調査対象者

神奈川県内の3市において幼稚園4園と小学校3校の協力を得て、幼稚園または小学校に子どもを通わせている保護者を対象に質問紙調査をおこなった。本研究では、保護者と一緒に公園に行く年齢の子どもを対象とするため、小学校には1, 2年生の保護者への調査票配布を依頼した。調査時期は2001年11月から12月であった。配布数は1090票(幼稚園730票, 小学校360票)で、回収数は716票(幼稚園507票, 小学校209票)、回収率は65.7%であった。このうち、本研究では、「公園づきあい」という観点から分析をおこなうため、対象者を等質化するため回答者が子どもの母親であるもののみを分析対象とした。このため、回答者が子どもの母親以外のものや、回答に不備のあったものは分析対象から除外し、最終的な分析対象は572票(回収票数の79.9%)であった。子どもの学年ごとにとみると、幼稚園の年少103票, 年中171票, 年長130票, 小学生168票(小学生は回収票数が少なかったため、学年を込みにした)であった。以下、分析において子どもの学年間の比較をする際には、幼稚園の年少児の母親を「年少群」、年中児の母親を「年中群」、年長児の母親を「年長群」、小学生の母親を「小学生群」と表記する。

### 調査方法

調査は対象とした幼稚園の園長または小学校の学校長を通じて、保護者へ依頼した。調査の記入については、自記式の調査票を用い、留め置き調査法で実施した。なお、調査は無記名式であり、質問項目、回答内容についてもプライバシーには

十分に配慮した。

### 質問項目

本研究では、川口ら(2002)において実施された質問紙調査から、保護者及び子どもの基本属性を質問したフェイスシートと、以下に述べる公園における子どもの遊びと子育てコミュニケーションの実態に関する項目を主な分析対象にした。本稿では直接は分析対象とはしないが、質問紙には他に、遊び場の活用の実態、遊び場に対する要望、理想的な子どもの遊び場や公園についての意見などの項目が含まれていた(これらの項目に関する分析については、田爪・大石・川口・小泉・長谷川・柴村・高城(2002)を参照)。

**質問項目1. 公園づきあいの積極性** 子どもの遊び場である公園において、他の母親がいた場合、どの程度積極的にコミュニケーションをおこなうかについて質問した。回答項目として、「自分から積極的に話しかける」、「話しかけられれば、一緒に話す」、「挨拶や簡単なやりとり程度で、基本的には余り話さない」、「ほとんど話さない」の4つの選択肢を設けた。この項目については、一部の項目との関連をみる際に、コミュニケーションの積極度として、選択肢の左から順に4点~1点と得点化した。

### 質問項目2. 公園づきあいにおける会話の内容

母親同士のコミュニケーションの内容を検討するため、上記質問項目1において「ほとんど話さない」と回答したものを除き、公園での会話の内容について質問した。回答項目として、子育てや子どもの教育といった子どもに関する話題である「a. 子育てに関する話題」、「b. 教育に関する話題」、「c. 園(学校)に関する話題」、自分の家庭や自分自身に関する話題である「d. 家庭の問題」、「e. 自分の事」、「f. 流行・趣味」、一般的な話題である「g. 地域の話」、「h. 一般のニュース」の、計8項目を設定し、それぞれについて「よく話す」、「時々話す」、「あまり話さない」の3件法でその頻度を回答するよう求め、左から順に3~1点というように、会話の頻度を得点化した。

### 質問項目3. 公園づきあいの目的 母親の公園

づきあいの目的について検討するため、上記質問項目1において「ほとんど話さない」と回答したものを除き、公園づきあいの目的について質問した。回答項目は宮坂(2000)の質問項目に従い、公園づきあいの主目的が子どものためなのか、母親自身のためなのかという点に着目し、主に子どもに関する内容として「a. 子どもの友だちをつくるため」、「b. 育児に関する情報を集めるため」、主に母親自身に関する内容として「c. 自分の友だちをつくるため」、「d. ストレス解消のため」、「e. 家にいても退屈なため」、さらに積極的な目的意識のない「f. 世間話をするため」という計6項目を設定し、このうちから2項目を選択するように求めた。

**質問項目4. 公園づきあいのある母親との公園外でのつきあい** 公園づきあいにおけるコミュニケーションの深さ、およびその広がりについて検討するため、公園におけるつきあいがそこに限定された関係なのか、それとも公園以外でのつきあいにも発展しているのかという問題について質問した。回答項目は宮坂(2000)の質問項目に従い、「a. 公園以外でのつきあいは無い」、「b. 誰かの家でおしゃべりをしたり、子どもを遊ばせる」、「c. 公園以外の場所に一緒に外出する」、「d. 必要な時に子どもを預け合う」、「e. 子育てサークルをつくって活動する」という計6項目を設定し、このうちから当てはまる項目すべてを選択するように求めた。なお、「e. 子育てサークルをつくって活動する」については、選択者数が非常に少なく(全体で $n=12$ (1.9%))、本研究では分析から除外した。

**質問項目5. 公園の利用頻度** 子どもの遊び場であり、なおかつ公園づきあいの場でもある公園をどのくらいの頻度で利用するかについて質問した。平日と休日とに分けて質問し、平日については週あたりの利用回数、休日については週あたりの利用回数を回答するように求めた。

**質問項目6. 公園における子どもの遊び相手** 母親の公園づきあいの様相と、公園における子どもの遊びとの関連について検討するため、自分の子どもが誰と主に遊んでいるかについて質問した。

回答項目として、「a. ひとりで遊ぶ」、「b. きょうだいとのみ遊ぶ」、「c. 保護者(祖父母を含む)とのみ遊ぶ」、「d. 家族(保護者、きょうだい)で遊ぶ」、「e. 遊び場に来ている同年齢の子ども達と遊ぶ」、「f. 遊び場に来ている、異なる年齢の子ども達と遊ぶ」という、計6項目を設定した。本研究では、a~dを「家族と遊ぶ」群、eを「他の同年齢児と遊ぶ」群、fを「他の異年齢児と遊ぶ」群というように、3群に分類した。なお、複数項目の選択があった場合、eが含まれている場合は「他の同年齢児と遊ぶ」群、fまたはeとfが含まれている場合は「他の異年齢児と遊ぶ」群、それ以外は「家族と遊ぶ」群に分類した。

## 結果

各質問項目の分析においては、主に公園づきあいの積極性の影響に焦点を当てるため、各質問項目と公園づきあいの積極性(質問項目1)および子どもの学年との関連を中心に分析をおこなった。

**公園づきあいの積極性(質問項目1)** 公園づきあいの積極性について、「自分から積極的に話しかける」と回答したものを「積極性-高」群、「話しかけられれば、一緒に話す」と回答したものを「積極性-中」群、「挨拶や簡単なやりとり程度で、基本的には余り話さない」と回答したものを「積極性-低」群、「ほとんど話さない」と回答したものは「公園づきあい無し」群とした。なお、「公園づきあい無し」群は、公園づきあい自体をあまりおこなっていないと考えられるため、「公園づきあい」の内容を質問した質問項目2, 3, 4については回答を求めておらず、これらの項目については分析の対象から除外した。

公園づきあいの積極性の各群の分布をFigure 1に示す。回答の傾向として、全てが積極的ではないものの、それ以上に「ほとんど話さない」という回答は少なく、公園において母親同士の何らかのコミュニケーションがおこなわれていることが伺われる。各群を左から順に4点~1点と得点化したところ、年少群では $m=2.94$ ( $sd=0.83$ )、年中群では $m=2.97$ ( $sd=0.83$ )、年長群では $m=3.00$ ( $sd=0.83$ )、小学生群では $m=2.73$ ( $sd=$

0.85)であった。子どもの学年間の平均値の差異を1要因分散分析によって比較したところ、主効果が有意であり ( $F(3, 605)=3.77, p<.05$ )、Tukey法による下位検定の結果(有意水準は5%とした。以下、下位検定は全て同様の手法を用いた)、幼稚園児の間では差はみられず、小学生群が他の群よりも平均値が低かった。

**公園づきあいにおける会話の内容(質問項目2)** 会話の内容別に母親同士の公園づきあいにおける頻度を得点化した値について、子どもの学年および質問項目1で設定した公園づきあいの積極性ごとに Table 1 に示す。全体として得点が高いのは「c. 園(学校)の話」、「a. 子育て」であり、逆に得点が低いのは「d. 家庭の問題」、「e. 自分の事」である。このことから、話題の中心は、公園利用の目的である子どもに関することであり、自分の家庭や自分自身のことといったプライベートな話題は比較的少ないということが伺われる。

以下、質問項目ごとに、子どもの学年×公園づきあいの積極性の分散分析の結果について述べる。まず、子どもに関する話題について、「a. 子育てに関する話題」については、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 539)=28.00, p<.001$ ) がみられ、積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。「b. 教育に関する話題」については、子どもの学年についての主効果の傾向 ( $F(3, 535)=2.56, p<.1$ ) および、公園づきあいの積極性の

主効果 ( $F(2, 535)=2.67, p<.001$ ) がみられ、後者については積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。「c. 園(学校)に関する話題」については、子どもの学年についての主効果 ( $F(3, 538)=8.14, p<.001$ ) および、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 538)=25.52, p<.001$ ) がみられ、前者については小学生群の得点が、他の群のそれよりも低かった。後者については、積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。

次に、自分の家庭や自分自身に関する話題について、「d. 家庭の問題」については子どもの学年についての主効果の傾向 ( $F(3, 532)=2.53, p<.1$ ) および、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 532)=9.63, p<.001$ ) がみられた。後者については、積極性～高群の得点が、積極性～中群および低群のそれよりも高かった。「e. 自分の事」については、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 534)=17.04, p<.001$ ) がみられ、積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。「f. 流行・趣味」については、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 533)=17.30, p<.001$ ) がみられ、積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。

一般的な話題について、「g. 地域の話」については、子どもの学年についての主効果 ( $F(3, 531)=2.69, p<.05$ ) および、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 532)=23.05, p<.001$ ) がみられ、前者については下位検定では有意な差はみられず、後者については積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。「h. 一般のニュース」については、公園づきあいの積極性の主効果 ( $F(2, 531)=16.82, p<.001$ ) がみられ、積極性が高い群ほど得点が高くなっていた。

以上の結果から、「c. 園(学校)に関する話題」を除けば、ほとんどの会話の頻度は子どもの学年よりも公園づきあいの積極性による影響を受けており、公園づきあいの積極性が高くなれば、会話の頻度も高くなることが示唆された。

**公園づきあいの目的(質問項目3)** 公園づきあいの目的について、子どもの学年および質問項目1で設定した公園づきあいの積極性ごとの選択率を Table 2 に示す。選択率がもっとも高かった

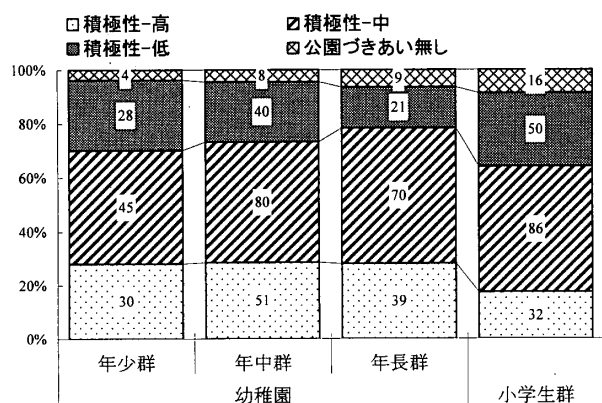


Figure 1. 公園づきあいの積極性(質問項目1)各群の割合  
 (グラフ中の数値は人数)

Table 1. 公園づきあいにおける会話の内容(質問項目2)

(各項目ごとに「よく話す=3」, 「時々話す=2」, 「あまり話さない=1」と得点化した平均値( $m$ )と標準偏差( $sd$ )

回答項目	子どもの学年	公園づきあいの積極性							
		高群		中群		低群		合計	
		$m$	( $sd$ )	$m$	( $sd$ )	$m$	( $sd$ )	$m$	( $sd$ )
a. 子育てに関する話題	年少群	2.53	(0.63)	2.17	(0.66)	1.89	(0.83)	2.20	(0.71)
	年中群	2.40	(0.57)	2.21	(0.68)	1.87	(0.73)	2.16	(0.66)
	年長群	2.41	(0.64)	2.22	(0.64)	1.67	(0.66)	2.10	(0.65)
	小学生群	2.39	(0.72)	2.10	(0.63)	1.83	(0.72)	2.11	(0.69)
	(学年計)	2.43	(0.64)	2.18	(0.65)	1.82	(0.74)	2.14	(0.68)
b. 教育に関する話題	年少群	1.93	(0.64)	1.53	(0.63)	1.44	(0.70)	1.63	(0.66)
	年中群	1.92	(0.53)	1.75	(0.67)	1.33	(0.48)	1.67	(0.56)
	年長群	1.84	(0.65)	1.75	(0.56)	1.62	(0.74)	1.74	(0.65)
	小学生群	2.23	(0.72)	1.77	(0.69)	1.53	(0.62)	1.84	(0.67)
	(学年計)	1.98	(0.63)	1.70	(0.64)	1.48	(0.63)	1.72	(0.63)
c. 園(学校)に関する話題	年少群	2.70	(0.47)	2.41	(0.54)	2.18	(0.67)	2.43	(0.56)
	年中群	2.72	(0.45)	2.49	(0.60)	2.10	(0.75)	2.44	(0.60)
	年長群	2.68	(0.53)	2.51	(0.56)	2.33	(0.58)	2.51	(0.56)
	小学生群	2.47	(0.73)	2.18	(0.66)	1.83	(0.60)	2.16	(0.66)
	(学年計)	2.64	(0.55)	2.40	(0.59)	2.11	(0.65)	2.38	(0.59)
d. 家庭の問題	年少群	1.40	(0.56)	1.19	(0.45)	1.30	(0.67)	1.30	(0.56)
	年中群	1.44	(0.58)	1.34	(0.53)	1.13	(0.34)	1.30	(0.48)
	年長群	1.62	(0.72)	1.44	(0.61)	1.24	(0.44)	1.43	(0.59)
	小学生群	1.42	(0.62)	1.21	(0.41)	1.11	(0.32)	1.25	(0.45)
	(学年計)	1.47	(0.62)	1.30	(0.50)	1.20	(0.44)	1.32	(0.52)
e. 自分の事	年少群	1.70	(0.54)	1.47	(0.59)	1.41	(0.64)	1.53	(0.59)
	年中群	1.66	(0.59)	1.62	(0.65)	1.21	(0.41)	1.50	(0.55)
	年長群	1.70	(0.74)	1.57	(0.63)	1.24	(0.44)	1.50	(0.60)
	小学生群	1.71	(0.64)	1.34	(0.53)	1.24	(0.43)	1.43	(0.53)
	(学年計)	1.69	(0.63)	1.50	(0.60)	1.28	(0.48)	1.49	(0.57)
f. 流行・趣味	年少群	1.69	(0.66)	1.52	(0.63)	1.31	(0.62)	1.51	(0.64)
	年中群	1.82	(0.72)	1.57	(0.64)	1.26	(0.50)	1.55	(0.62)
	年長群	1.59	(0.73)	1.59	(0.60)	1.33	(0.66)	1.50	(0.66)
	小学生群	1.90	(0.75)	1.45	(0.62)	1.26	(0.49)	1.54	(0.62)
	(学年計)	1.75	(0.71)	1.53	(0.62)	1.29	(0.57)	1.52	(0.63)
g. 地域の話	年少群	2.13	(0.51)	1.70	(0.63)	1.59	(0.69)	1.81	(0.61)
	年中群	2.20	(0.58)	1.92	(0.66)	1.62	(0.67)	1.91	(0.64)
	年長群	1.95	(0.66)	1.76	(0.55)	1.45	(0.51)	1.72	(0.58)
	小学生群	2.13	(0.62)	1.89	(0.58)	1.72	(0.58)	1.91	(0.59)
	(学年計)	2.10	(0.59)	1.82	(0.61)	1.60	(0.62)	1.84	(0.60)
h. 一般のニュース	年少群	2.17	(0.53)	1.91	(0.61)	1.69	(0.62)	1.92	(0.59)
	年中群	1.98	(0.55)	1.86	(0.64)	1.74	(0.60)	1.86	(0.60)
	年長群	2.14	(0.63)	1.84	(0.56)	1.67	(0.58)	1.88	(0.59)
	小学生群	2.23	(0.57)	1.97	(0.58)	1.76	(0.44)	1.99	(0.53)
	(学年計)	2.13	(0.57)	1.90	(0.60)	1.72	(0.56)	1.91	(0.58)

ものは「a. 子どもの友だちをつくるため」、次いで「b. 育児に関する情報を集めるため」であり、子どもに関連した目的が比較的多く選択されていた。また、公園づきあいの積極性によって

比較すると、「c. 自分の友だちづくり」は、年少群 ( $\chi^2(2)=6.59, p<.05$ )、年中群 ( $\chi^2(2)=7.20, p<.05$ )、小学生群 ( $\chi^2(2)=16.28, p<.001$ ) において、母親の公園づきあいの積極性が高くな

るほど選択率が高くなっていた。この結果から、公園づきあいに積極的な母親は子どもだけでなく自身のための場として遊び場を捉えていることが伺われる。また、「f. 世間話」は、年長群において母親の公園づきあいの積極性が低くなるほど選択率が高くなっていた ( $\chi^2(2)=22.09, p<.001$ )。

公園づきあいのある母親との公園外でのつきあい(質問項目4) 公園づきあいのある母親との公園以外でのつきあいについて、子どもの学年および質問項目1で設定した公園づきあいの積極性ごとの選択率をTable 3に示す。どの学年においても、公園外でのつきあい方のすべての項目について、母親の公園づきあいの積極性との関連がみ

Table 2. 公園づきあいの目的(質問項目3)

回答項目	子どもの学年	公園づきあいの積極性				$\chi^2$ 値
		高群	中群	低群	合計	
a.子どもの友だちをつくるため	年少群	18 (60.0)	30 (66.7)	22 (78.6)	70 (68.0)	2.36
	年中群	34 (66.7)	45 (56.3)	30 (75.0)	109 (63.7)	4.33
	年長群	19 (48.7)	48 (68.6)	15 (71.4)	82 (63.1)	4.99 +
	小学生群	16 (50.0)	55 (64.0)	30 (60.0)	101 (60.1)	1.89
	(学年計)	87 (56.4)	178 (63.9)	97 (71.3)	362 (63.7)	4.06
b.子育てに関する情報を集めるため	年少群	8 (26.7)	19 (42.2)	6 (21.4)	33 (32.0)	3.99
	年中群	15 (29.4)	25 (31.3)	12 (30.0)	52 (30.4)	0.05
	年長群	15 (38.5)	24 (34.3)	7 (33.3)	46 (35.4)	0.24
	小学生群	10 (31.3)	27 (31.4)	19 (38.0)	56 (33.3)	0.70
	(学年計)	48 (31.5)	95 (34.8)	44 (30.7)	187 (32.8)	0.06
c.自分の友だちをつくるため	年少群	15 (50.0)	10 (22.2)	8 (28.6)	33 (32.0)	6.59 *
	年中群	24 (47.1)	30 (37.5)	8 (20.0)	62 (36.3)	7.20 *
	年長群	16 (41.0)	30 (42.9)	4 (19.0)	50 (38.5)	4.02
	小学生群	21 (65.6)	25 (29.1)	13 (26.0)	59 (35.1)	16.28 ***
	(学年計)	76 (50.9)	95 (32.9)	33 (23.4)	204 (35.5)	21.39 ***
d.ストレス解消のため	年少群	7 (23.3)	2 (4.4)	4 (14.3)	13 (12.6)	5.92 +
	年中群	9 (17.6)	12 (15.0)	5 (12.5)	26 (15.2)	0.47
	年長群	9 (23.1)	9 (12.9)	1 (4.8)	19 (14.6)	4.05
	小学生群	5 (15.6)	12 (14.0)	3 (6.0)	20 (11.9)	2.43
	(学年計)	30 (19.9)	35 (11.6)	13 (9.4)	78 (13.6)	6.44 *
e.家にいても退屈なため	年少群	5 (16.7)	4 (8.9)	4 (14.3)	13 (12.6)	1.08
	年中群	2 (3.9)	6 (7.5)	4 (10.0)	12 (7.0)	1.32
	年長群	2 (5.1)	5 (7.1)	3 (14.3)	10 (7.7)	1.68
	小学生群	1 (3.1)	3 (3.5)	3 (6.0)	7 (4.2)	0.61
	(学年計)	10 (7.2)	18 (6.8)	14 (11.2)	42 (7.9)	2.46
f.世間話をするため	年少群	5 (16.7)	6 (13.3)	2 (7.1)	13 (12.6)	1.23
	年中群	5 (9.8)	9 (11.3)	4 (10.0)	18 (10.5)	0.09
	年長群	6 (15.4)	1 (1.4)	8 (38.1)	15 (11.5)	22.09 ***
	小学生群	3 (9.4)	19 (22.1)	10 (20.0)	32 (19.0)	2.49
	(学年計)	19 (12.8)	35 (12.0)	24 (18.8)	78 (13.4)	1.02

\*\*\*.p<.001, \*.p<.05, +.p<.1

Table 3. 公園づきあいのある母親との公園外でのつきあい

(質問項目4)

(a~dの項目から複数選択. 数値は人数, 括弧内は選択率(%))

回答項目	子どもの学年	公園づきあいの積極性				$\chi^2$ 値
		高群	中群	低群	合計	
a.公園以外でのつきあいは無い	年少群	4 (13.3)	17 (37.8)	15 (53.6)	36 (35.0)	10.60 **
	年中群	7 (13.7)	27 (33.8)	24 (60.0)	58 (33.9)	21.42 ***
	年長群	4 (10.3)	21 (30.0)	13 (61.9)	38 (29.2)	17.65 ***
	小学生群	4 (12.5)	34 (39.5)	25 (50.0)	63 (37.5)	12.02 **
	(学年計)	19 (12.5)	99 (35.3)	77 (56.4)	195 (33.9)	59.56 ***
b.誰かの家でおしゃべりをしたり,子どもを遊ばせる	年少群	26 (86.7)	22 (48.9)	9 (32.1)	57 (55.3)	18.77 ***
	年中群	37 (72.5)	43 (53.8)	10 (25.0)	90 (52.6)	20.41 ***
	年長群	27 (69.2)	41 (58.6)	5 (23.8)	73 (56.2)	11.80 **
	小学生群	23 (71.9)	38 (44.2)	13 (26.0)	74 (44.0)	16.66 ***
	(学年計)	113 (75.1)	144 (51.4)	37 (26.7)	294 (52.0)	75.11 ***
c.公園以外の場所に一緒に外出する	年少群	21 (70.0)	13 (28.9)	7 (25.0)	41 (39.8)	16.22 ***
	年中群	21 (41.2)	16 (20.0)	5 (12.5)	42 (24.6)	11.64 **
	年長群	14 (35.9)	25 (35.7)	3 (14.3)	42 (32.3)	3.72
	小学生群	15 (46.9)	22 (25.6)	11 (22.0)	48 (28.6)	6.69 *
	(学年計)	71 (48.5)	76 (27.6)	26 (18.5)	173 (31.3)	32.46 ***
d.必要な時に子どもを預け合う	年少群	17 (56.7)	12 (26.7)	5 (17.9)	34 (33.0)	11.32 **
	年中群	17 (33.3)	14 (17.5)	8 (20.0)	39 (22.8)	4.67 +
	年長群	15 (38.5)	21 (30.0)	1 (4.8)	37 (28.5)	7.79 *
	小学生群	15 (46.9)	24 (27.9)	11 (22.0)	50 (29.8)	6.07 *
	(学年計)	64 (43.9)	71 (25.5)	25 (16.2)	160 (28.5)	27.52 ***

\*\*\*.p&lt;.001, \*\*.p&lt;.01, \*.p&lt;.05, +.p&lt;.1

られた。すなわち、「a. 公園以外でのつきあいは無い」の選択率は、全ての学年において公園づきあいの積極性が高くなるほど低くなっていた(年少群- $\chi^2(2)=10.60$ ,  $p<.01$ ; 年中群- $\chi^2(2)=21.42$ ,  $p<.001$ ; 年長群- $\chi^2(2)=17.65$ ,  $p<.001$ ; 小学生群- $\chi^2(2)=12.02$ ,  $p<.01$ )。「b. 誰かの家でおしゃべりをしたり,子どもを遊ばせる」の選択率については、全ての学年において、公園づきあいの積極性が高くなるほど高くなっていた(年少群- $\chi^2(2)=18.77$ ,  $p<.001$ ; 年中群- $\chi^2(2)=20.41$ ,  $p<.001$ ; 年長群- $\chi^2(2)=11.80$ ,  $p<.01$ ; 小学生群- $\chi^2(2)=16.66$ ,  $p<.001$ )。「c. 公園以外の場所に一緒に外出する」の選択率については、年長群以外で、公園づきあいの積極性が高くなるほど高くなっていた(年少群- $\chi^2(2)=16.22$ ,  $p<.001$ ; 年中群- $\chi^2(2)=11.64$ ,

$p<.01$ ; 小学生群- $\chi^2(2)=6.69$ ,  $p<.05$ )。「d. 必要な時に子どもを預け合う」の選択率については、全ての学年において、公園づきあいの積極性が高くなるほど高くなるか、あるいはその傾向がみられた(年少群- $\chi^2(2)=11.32$ ,  $p<.01$ ; 年中群- $\chi^2(2)=4.67$ ,  $p<.1$ ; 年長群- $\chi^2(2)=7.79$ ,  $p<.05$ ; 小学生群- $\chi^2(2)=.07$ ,  $p<.05$ )。つまり、公園外でのつきあいは、公園づきあいの積極的な者ほど多くおこなっており、逆に公園外でのつきあいの無い者は、公園におけるつきあいが消極的な者ほど多かった。

公園の利用頻度(質問項目5) 平日の公園の利用頻度については、週当たり1回( $n=188$ (38.4%))および2,3回( $n=183$ (37.4%))が多く、4回以上の者も11.0%( $n=54$ )みられた。一方で、0回とする回答も13.1%( $n=64$ )



みられる。平日の公園の利用頻度および子どもの年齢ごとの、公園づきあい積極性の得点（質問項目1）について Figure 2 に示す。公園づきあい積極性の得点について、平日の公園の利用頻度×子どもの年齢の分散分析をおこなった結果、公園の利用頻度の主効果（ $F(3, 473) = 8.02, p < .001$ ）がみられた。下位検定の結果、公園の週あたりの利用回数が4回以上の群および2, 3回の群で最も積極性の得点が高く、1回の群, 0回の群の順で積極性の得点が低くなっていた。すなわち、公園の利用頻度が少ないほど、積極性の得点は低くなっていた。

休日の公園の利用頻度については、月あたり1回（ $n = 177$  (36.4%)) および2, 3回（ $n = 213$  (43.8%)) が多く、4回以上の者も15.4%（ $n = 75$ ）みられた。一方で、0回とする回答（ $n = 21$  (4.3%)) も少ないながらもみられている。平日の場合と同じく、公園づきあい積極性の得点について、休日の公園の利用頻度×子どもの年齢の分散分析をおこなったが、主効果および交互作用はみられなかった。

**公園における子どもの遊び相手と母親の積極性との関連（質問項目6）** 子どもの遊び相手および子どもの年齢ごとの、公園づきあいの積極性の得点（質問項目1）について Figure 3 に示す。公園づきあいの積極性の得点について、子どもの遊び相手×子どもの年齢の分散分析をおこなった結果、子どもの遊び相手（ $F(2, 531) = 28.11, p < .001$ ）および子どもの年齢（ $F(3, 531) = 3.98, p < .01$ ）の主効果がみられた。子どもの遊び相手

についての下位検定の結果、「家族と遊ぶ」群は、他の群よりも公園づきあいの積極性が低かった。また、子どもの年齢についての下位検定の結果、小学生群は他の群よりも公園づきあいの積極性が低かった。

## 考 察

以下では、本研究の結果にみられた母親の公園づきあいの実態と子どもの公園での遊びについて、母親の公園づきあいの積極性との関連という点から考察をおこなう。

**母親の公園づきあいの実態** 公園づきあいの積極性（質問項目1）についての分析結果から、公園づきあいをまったくおこなっていない母親は少数であり、積極的では無いにせよ、公園において母親同士は何らかのコミュニケーションをとっていることが伺われた。公園づきあいにおける会話の内容（質問項目2）や公園づきあいの目的（質問項目3）については、公園づきあいの積極性によってその内容が異なることが示された。すなわち、公園づきあいに積極的であるほど、公園づきあいの内容や目的が、子どもに関するものに加え自分自身に関するものが増える傾向にあった。このことから、公園づきあいを母親だけではない、一個人としての自分自身に動機づけられたより主体的なものと捉えることが、公園づきあいの積極性に寄与している可能性が考えられる。

また、公園外でのつきあい（質問項目4）については、公園づきあいの積極性が高いほど多くおこなっており、公園づきあいは公園以外での日常生活におけるコミュニティの広がりとも関連していることが伺われる。公園の利用頻度（質問項目5）についても、公園づきあいの積極性が高いほど公園を多く利用している。この結果は、公園を利用すればそれだけつきあいも増えるという結果として解釈できるが、このことが逆に、公園づきあいに積極的な母親が公園でグループを作り、積極性の低い母親はその集団に入っていくにくい、ひいては公園自体を利用しづらい状況になってはいないかという点については懸念される。

公園づきあいの積極性と子どもの公園での遊び

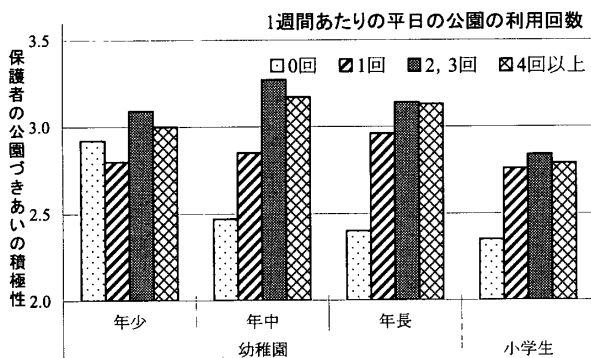


Figure 2. 1週間あたりの平日の公園の利用回数（質問項目5）による、公園づきあいの積極性得点

**との関連** 本研究では、母親同士の公園づきあいの内容について検討することに加え、公園づきあいの積極性と、本来の公園利用の主目的である、子どもの公園での遊びとの関連を検討することを目的としている。本研究では1つの視点として、子どもの公園での遊び相手と、母親の公園づきあいの積極性との関連を指標とした。その結果、全ての学年において、「家族と遊ぶ群」は、家族以外の異年齢・同年齢の友達と遊ぶ群よりも母親の公園づきあいの積極性の得点が低かった。

本研究の対象は幼稚園児および小学生をもつ母親であり、子どもはそれ以前のいわゆる「公園デビュー」の時期に比べると、遊びにおける母親の関わりは比較的少なくなっていると考えられる。しかしながら本研究では幼児期において子どもの遊び相手と母親の公園づきあいの積極性の得点との間に関係がみられ、さらにそれ以上に母親の関わりが少なくなると考えられる小学生においても同様の傾向がみられたことは注目すべき点であるといえる。この結果については、主に2つの方向からの解釈が可能であると考えられる。まず1つは、親同士の公園づきあいの積極性の高低が、子どもの遊びに影響を与えている可能性である。すなわち、他の母親との公園づきあいが消極である場合、母親は子どもへの関わりが中心となり、相対的に子どもは他の子どもへの関わりも少なくなる。反対に、他の母親との公園づきあいが積極的である場合、母親は他の母親と関わるため、母親は子どもと関わる頻度が少なくなり、子どもは他の子どもと関わる機会が増える、もしくは、他

の母親と子どもとを交えた遊びが展開する可能性が考えられる。また、母親の子どもに対する直接的・間接的態度によって、母親の行動様式は子どもに学習されることもあり、母親の積極性が子どものそれにも影響を与えている可能性も考えられる。

もう1つは、子どもの公園での積極性が、母親の公園づきあいの積極性に影響を与えた可能性である。すなわち、子どもが公園で他児と遊ぶことを好まない場合、必然的に子どもの遊び相手は母親が主になり、その結果母親は他の母親と関わる頻度が減少する。反対に子どもが他児と積極的に遊ぶ場合、双方の母親の公園づきあいがおこなわれやすくなる可能性が考えられる。いずれにせよ、本研究の結果は母親の公園づきあいの積極性と、子どもの遊びとの間には関連性があることを示唆している。しかし、これらの2つのうちどちらの解釈に依拠するべきか、または両者の交絡として考えるべきかについては、本研究の結果のみからでは詳細には言及することは難しく、この因果関係を明らかにすることは今後の課題である。

ところで、この結果の解釈について、子どもの遊びのためには母親は公園づきあいを積極的におこなわなければならない、と短絡的に考えるのは早急であることを付け加えておく。なぜなら、それ以前に公園は本来自然発生的な遊び集団が形成される場所であるにもかかわらず、母親が介入しなければならなくなったこと、さらには本来家庭や地域社会においておこなわれてきた子育てに関する情報交換が、公園に行かなければ難しくなっていることをもう一度問い直す必要があるからである。また、母親が精神的負担を感じながら無理に公園づきあいをするということ自体、子育てにとって望ましい姿であるとはいえないであろう。

このような問題の解決の1つの糸口として、子育て支援の充実やプレイリーダーの充実(梶木・瀬渡・田中, 2002など)が挙げられる。特に子育て支援活動においては、専門家の子どもや母親への支援が重要であるのは当然ながら、地域におけるマネジメント的な役割も必要になるのではないだろうか。すなわち、たとえば施設を積極的に開

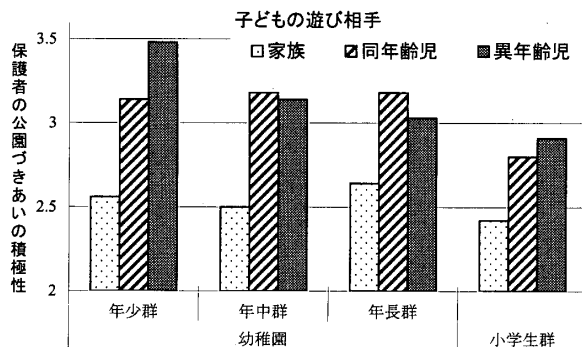


Figure 3. 子どもの遊び相手 (質問項目6) による、公園づきあいの積極性得点

放し、親子または子ども同士、家族同士で遊べる空間を提供したり、さらには母親が子どもを自由に遊ばせ、その間に施設の中で母親同士が関わることのできるような、地域の子育てにおける人間関係を活性化するような取り組みである。このような取り組みにより、子育てをめぐる母親同士のコミュニケーションがより子育てにとって負担の少ない、有効なものとなるのではないだろうか。

最後に、本研究における今後の課題について述べておく。本研究は質問紙による調査であったが、さらに母親同士の公園づきあいの実態について明らかにするためには、実際の公園におけるフィールドワークやエスノメソロジーなどの研究手法を取り入れる必要があろう。また、本研究の対象者は、幼稚園児、小学生をもつ母親であったが、3歳児未満の子どもを持ち「公園デビュー」の時期にある母親との比較や、公園づきあいの縦断的な検討が必要であろう。

### 引用文献

- 大都市子育て環境研究会（代表研究者：斉藤敦能）  
2003 大都市の子育て環境における健康・心理面の課題分析に関する調査研究 平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書
- 梶木典子・瀬渡章子・田中智子 2000 プレイリーダーのいる子どもの遊び場に対するニーズと評価—「プレイスクール」における事例評価— 日本家政学会誌, 51, 497-508.
- 川口和英・小泉裕子・長谷川岳男・柴村抄織・大石美佳・田爪宏二・高城義太郎 2002 幼児の遊び場と子育てでコミュニケーションに関する調査研究報告書財団法人こども未来財団委託研究報告書
- 松岡悦子 1996 消費社会の出産と育児 斎藤茂男（編）子どもの世間 小学館 pp. 55-86.
- 宮坂靖子 2000 育児不安と育児ネットワーク—「公園づきあい」の視点から— 家族研究論叢, 55-76.
- 森榊 1992 遊びで決まる仲間での地位—遊べない子はいじめられる— 遊びの原理に立つ教育 黎明書房 pp. 214-249.
- 本山ちさと 1995 公園デビュー DHC

- 汐見稔幸 1996 幼児教育産業と子育て 岩波書店
- 田爪宏二・大石美佳・川口和英・小泉裕子・長谷川岳男・柴村抄織・高城義太郎 2002 子どもの遊び場の活用実態と遊び場に対する要望—保護者への調査からの検討— 児童研究, 81, 21-31.

### 付記

本研究は、財団法人こども未来財団からの委託研究「幼児の遊び場と子育てでコミュニケーションに関する調査研究」における研究資料の一部を再分析したものである。本研究の一部は、日本心理学会第66回大会（2002年）および第67回大会（2003年）において発表された。

本研究をおこなうにあたり、質問紙調査にご協力いただきました幼稚園、小学校の職員の皆様、保護者の皆様に記して心より感謝します。

### 要旨

本研究では、公園などの子どもの遊び場における、母親同士のコミュニケーションについて検討した。幼稚園児および小学校低学年の保護者を対象に、質問紙調査により、公園におけるつきあいの目的、内容、積極性について質問した。さらに、公園づきあいの積極性の子どもの遊びへの影響についても検討した。

結果では、公園づきあいに積極的な母親ほど、子どもだけでなく、自分自身のために公園づきあいをおこなっていた。さらに、子どもが家族以外の子どもと遊んでいる群のほうが、母親は公園づきあいに積極的であった。これらの結果は、子育ておよび子どもの遊び場における母親の役割に関する問題という点から考察された。

(2003. 10. 21 受稿)